

『完全な者に』

ヘブル人への手紙 13 章 15～21 節

1. いけにえ

ヘブル人への手紙は、ユダヤ教が背景にある信者たちを対象に記されているので、旧約聖書の言及が多く、また犠牲制度への言及が多く記されています。著者は、それらの犠牲制度は究極のものではなく、キリストの福音を示すための、比喻（9 章 9 節）、模型（9 章 24 節）、影（10 章 1 節）、そういったものなのだ、本体はキリストにあると、キリストの偉大さを教えることに心を砕いてきました。そして、後半は、偉大なキリストに信仰の目を注ぐように教えてきました。

ヘブル人への手紙の教えは 17 節で終わりますが、15～16 節に、いけにえの言及があります。それは祭司とされている新約時代の私たちが献げるいけにえです。

15 節に「**それなら、私たちはイエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか。**」とあります。キリストが最終的ないけにえを捧げてくださったおかげで古い契約の捧げ物の時代は完全に過去のものとなったことをヘブル人への手紙は強調しています。今やキリスト教会にはふさわしい捧げ物がたったひとつだけ残されました。それは感謝の捧げ物です。

旧約聖書には、イスラエルの民が神を礼拝する時には動物のいけにえをささげることが求められていましたが、イエス様が私たちのためにご自分のいのちという最高のいけにえをささげてくださったので、キリスト者にはそのような動物のいけにえではなく、神が喜ばれる霊的ないけにえをげようというのです。そのいけにえとは、どのようなものでしょうか。一つは「**賛美のいけにえ**」、すなわち御名をたたえる「**唇の果実**」です。「唇」を通してささげられる賛美と感謝です。

また生活において、愚痴ではなく、賛美を習慣にすることはとても大切です。詩篇 71 篇 8 節に「**私の口にはあなたへの賛美があなたの栄えが絶えず満ちています。**」とあり、詩篇 119 篇 164 節「**あなたの義のさばきのゆえに私は日に七度あなたをほめたたえます。**」とある通りです。

2. もっと祈ってください

そして、神に感謝を捧げるもう一つのやり方は、神の意思に従って生きていくことです。このような生き方はキリスト者の周りにいる人々にも神の善き御業への感謝の心を生み出していきます。

17～19 節に「**あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人たちは神に申し開きをする者として、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆きながらすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にはならないからです。私たちのために祈ってください。私たちは正しい良心を持っていると確信しており、何事についても正しく行動したいと思っているからです。私があなたがたのもとに早く戻れるように、なおいっそう祈ってくださるよう、お願いします。**」とあります。この手紙の著者は、最後のところに来て、教会の指導者と信徒の関係について教えています。そしてその関係というのは、「**あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。**」ということです。また、「**この人たちが喜んでそのことをし、嘆きながらすることにならないようにしなさい。**」ということです。どうしてここに来て、指導者と信徒の関係について語っているのでしょうか。それは 7 節でも「**神のことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、覚えていなさい。彼らの生き方から生まれたものをよく見て、その信仰に倣いなさい。**」と言われていたことですが、異なった教えに迷わされないように、神の言葉にしっかりと立続けるためです。そのためには、神の御言葉をあなたがたに話した指導者たちのことを思い起こし、彼らの言うことを聞くことが必要です。そのことをここでは、この人たちは神に弁明する者であって、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです、とされています。どのようにして見張りをしているのかというと、神の言葉によってです。だから、神の言葉をもって

指導している指導者たちの言うことに従うことが必要であって、それは、自分自身の益のためにもなることなのです。

けれども、ここでこの手紙の著者が指導者に服従するようと言っている最も大きな理由は、その後の 18 節にあるように、指導者のためにも祈ってほしいということを伝えたかったからです。ここには指導者と信徒との関係は単に指導する者とされる者という関係以上のものであることが示されています。つまり、指導者と信徒の関係は祈りの関係であるということです。手紙の著者は 18 節で、「**私たちのために祈ってください。**」と懇願しています。

また、19 節には、「**なおいっそう祈ってくださるよう、お願いします。**」とあります。ここでは教会の指導者たちが信徒のために祈るというのではなく、むしろ教会の信徒が指導者たちのために祈ってほしいと言っているのです。もちろん、牧師は神の祭司として信徒のためにとりなして祈る務めが与えられていますが、その祈りは一方通行ではなく互いになされるものなのです。牧師が信徒のために祈るというだけでなく、信徒もまた牧師のために祈るという相互の祈りが求められているのです。そのようにしてこそ牧師と信徒の信頼関係が構築され、深められて、キリストのからだである教会が、キリストの御丈にまで達することができるのです。

祈りの中で神に相手の欠けを補ってくださるように願うというのはすばらしいです。というのは、その問題を真に解決できるのは神しかいないからです。真の解決とは祈りの中でその人自身が変わえられることだからです。イエス様は、「**教会は、祈りの家でなければならない。**」と言われました。なぜなら、教会は祈りの中から生まれたからです。

教会はどのようにして誕生したのでしょうか。ペンテコステというユダヤ教のお祭りの時、キリストの最初の弟子たちがたぶんマルコの母マリヤの家に集まり、心を合わせ、祈りに専念していたとき、突然、天から、激しい風が吹いてくるように聖霊が降ることによって誕生したのです。その日、三千人ほどが彼らの仲間に加えられました。ですから、教会は祈りの家でなければならないのです。教会が祈らなかつたら教会ではなくなってしまいます。教会は祈りを通して神にすべてをゆだね、神が働いてくださることによって、すべての問題が解決されていくところなのです。

この手紙の著者はここで、「**私たちは正しい良心を持っていると確信しており、何事についても正しく行動したいと思っているからです。**」と言っています。なぜ指導者のために祈らなければならないのでしょうか。それは指導者が正しい良心、純粋な良心を持って、何事についても正しく行動しようと願っているからです。教会の指導者がそのように生きているのなら、そのような指導者の言うことに従い、彼らのために祈るというのは、むしろ望むところではないのでしょうか。

皆さんも、私のために祈ってくださると思いますが、ぜひ祈ってください。例えば、パウロはローマ 15 章 30 節で「**兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によってお願いします。私のために、私とともに力を尽くして、神に祈ってください。**」と言っています。この「力を尽くして」という言葉は、スポーツ選手がベストを尽くす時に使われる言葉です。そのような力を尽くして祈ってほしいと言ったのです。偉大な人であっても祈りを必要としています。パウロは自分の知恵や力によって神の働きをすることはできないということをよく自覚していました。パウロが他の人たちよりも多く働くことができたのは、彼がそのような器として神に選ばれていたことは確かですが、と同時に、他の人たちよりも多く祈られていたからでもあるのです。

このヘブル人の手紙の著者も、「**私たちのために祈ってください。**」と言いました。いや、「**なおいっそう祈ってくださるよう**」とお願いしました。私たちは時々「祈ってください」とか、「祈っています」というのが口癖になっていることがあります。どこか社交辞令になりさがっていることがあります。そうした当たり前としての祈りの要請ではなく、本気で祈ってほしいと懇願しているのです。これが祈りに生きている人の姿です。私たちも互いのために本気で祈り合うべきです。もっと祈ってくださるようお願いいたします。祈り祈られる関係、それこそ神が私たちの教会に望んでおられることなのです。

3. 大牧者、平和の神

次に 20～21 節に「**永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを、死者の中から導き出された平和の神が、あらゆる良いものをもって、あなたがたを整え、みこころを行わせてくださいますように。また、御前でみこころ**

にかなうことを、イエス・キリストを通して、私たちのうちに行ってくださいますように。栄光が世々限りなくイエス・キリストにありますように。アーメン。」とあります。今度は、この手紙の読者たち、信徒たちのための祈りです。ここで著者は、「**平和の神**」がイエス・キリストによって、御心になうことを彼らのうちにしてくださるよう、また、彼らが御心になったことを行うことができるよう、あらゆる良いものを備えて、彼らを「**完全な者**」にしてくださるようにと祈っています。そして、この「**平和の神**」がどのような神なのかというと、「**永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを、死者の中から導き出された平和の神**」です。

まずこの「**永遠の契約の血による羊の大牧者**」とは父なる神のことであり、また、私たちの主イエス・キリストのことです。イエス様は偉大な「**大牧者**」です。「**牧者**」というのは羊飼いのことです。イエス様は偉大な羊飼いであるということです。イエス様は、「**わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。**」（ヨハネ 10 章 11 節）と言われました。イエス様は私たちのためにご自身のいのちを捨ててくださいました。それは、羊である私たちがこの方であって永遠のいのちを持つためです。まことにイエス様は私たちの永遠の「**大牧者**」です。心配事で不安にさいなまれる時、主は共にいて助けてくださいます。人生に疲れ果てもう立ち上がれないと思う時、主は励ましを与えてくださいます。病気で苦しむ時には、いやしを与え、死の陰の谷を歩くような時には、あなたの前を歩いてくださいます。だから私たちは何も恐れることはありません。この方が永遠にあなたの「**大牧者**」であるからです。

しかも、それは今だけのことでなく、今も、これから後もずっと、「**永遠**」にです。イエス様があなたの羊飼いであることはありません。なぜなら、この方は永遠の契約の血によって、あなたを贖ってくださいましたからです。これはどういうことかということ、イエス様が十字架の上であなたのために血を流してくださいましたということです。血を流すことがなければ、罪の赦しはないからです。イエス様が流された血は、私たちの罪を贖う永遠の神の契約の証でした。まさにイエス様は良い羊飼いとなって、あなたのためにいのちを捨ててくださいましたのです。あなたはそれほどまでに愛されているのです。であれば、この方があなたを見捨てたり、見離したりすることがあるでしょうか。ありません。13 章 5 節に「**わたしは決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない**」とあります。イエス様は決してあなたを見捨てたりはしないのです。イエス様はあなたの「**永遠**」の「**大牧者**」なのです。

そのイエスを死者の中からよみがえらせた父なる神は「**平和の神**」です。この時この手紙を受け取ったヘブル人キリスト者たちは迫害の苦しみの中にありました。彼らは同胞ユダヤ人からも、ローマ帝国からも激しい迫害を受けていました。彼らは目の上のたんこぶで、邪魔者扱いされていました。家を失い、財産を失い、仕事を失い、家族を失うという苦しみの中で、相当辛い思いをしていたのです。しかし、「**平和の神**」があなたがたとともにいてくださいます。この神は主イエスを死からよみがえらせてくださった神です。この神はどんな迫害の苦しみの中にあってもあなたを助け、あなたを守り、あなたに平安を与えて、その苦しみを乗り越えさせてくださる。この「**平和の神**」が、主イエスを死者の中からよみがえらせてくださったように、どんな状況からあなたを救ってくださいますのです。このことは、迫害で苦しんでいた彼らにとって何よりも大きな励みだったに違いありません。その「**平和の神**」が彼らのうちに働いて、彼らを完全な者にしてくださるようにと祈っているのです。これがこの祝福の祈りのハイライトです。

4. 完全な者に

21 節は、以前の訳では「**イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行い、あなたがたがみこころを行うことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。**」となっています。「**あなたがたを完全な者としてくださいますように。**」とありますが、では「**完全な者**」になるとはどういうことでしょうか。これは何の欠点もない完全無欠な聖人君子になるようにということではありません。この「**完全な者にする**」というギリシア語の言葉「カタルキゾウ」には、物事を適切な状態にするという意味があります。そこから、「修復する、整える、あるべき状態にする」、そういった意味で使用されるようになりました。この言葉は新約で 13 回見出されますが、この言葉

の概念をわかりやすく伝えている箇所は、例えば、マタイの福音書 4 章 21 節に使われています。「**イエスはそこから進んで行き、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイと一緒に舟の中で網を繕っているのを見ると、二人をお呼びになった。**」この「**網を繕っている**」の「**繕う**」という言葉です。すなわち、穴が開いた網を繕って正常なすることという意味なのです。

また、ガラテヤ 6 章 1 節には、「**兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。**」とありますが、この「**正してあげなさい**」という言葉でもあります。すなわち、間違った状態を正してあげることを言うのです。

また、テサロニケ第一 3 章 10 節には、「**私たちは、あなたがたの顔を見て、あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるようにと、夜昼、熱心に祈っています。**」とありますが、この「**補うことができるように**」という言葉です。不足しているものを補給するとか、補うという意味です。

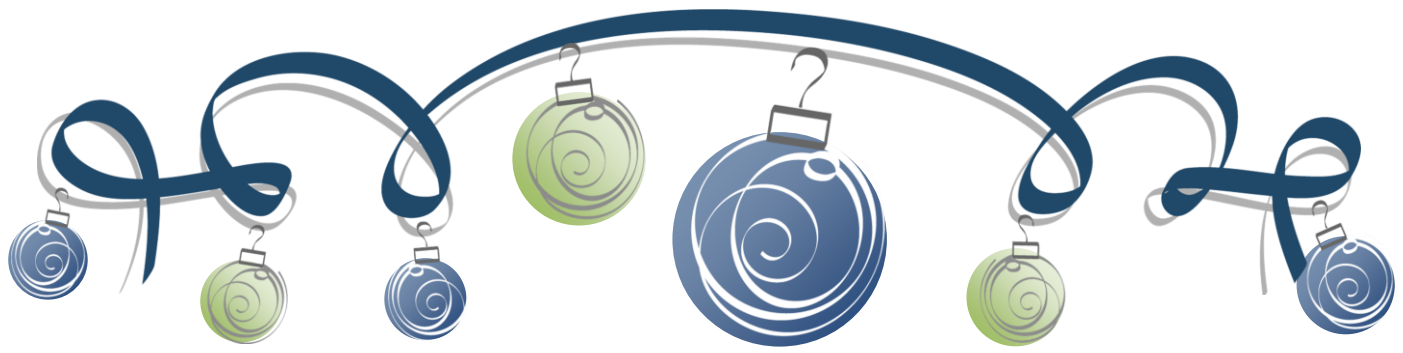
そして、コリント第一 1 章 10 節には、「**さて、兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたにお願いします。どうか皆が語ることを一つにして、仲間割れせず、同じ心、同じ考えで一致してください。**」とありますが、この「**一致**」と言う言葉です。本来であれば、キリスト者は一致していなければなりません、そうでないことがあるわけです。そういう状態を修復し、同じ心、同じ判断を完全に保つことができるようにすることを示しているのです。

このように、「**完全な者**」とするとは物事を適切な状態にすることです。間違ったところが正され、足りないところは補われ、破れたところが修復されて、神が望まれる状態に整えられることを言うのです。

私たちはどうでしょうか。私たちも魚の網が破れるように人生に敗れを生じているのではないのでしょうか。羊のように目先のことに捕らわれて、道に迷ってはいるのではないのでしょうか。霊的、精神的に、また肉体的、物質的に不足を感じているのではないのでしょうか。人間関係においても壊れかけているのではないのでしょうか。夫婦の間で、親子の間で、職場においても、友人との関係においても、壊れかけていませんか。壊れかけたラジオのように、壊れかけているのです。イエス様はそうした壊れかけたものを修復し、正常な状態に回復してくださいます。足りないところを補って満たしてくださいます。エペソ書 2 章 16 節に「**二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。**」とありますが、なぜなら、イエス様は十字架で敵意を廃棄されたからです。キリストの十字架の血によって、こうした破れた人生が正常な状態になるようにと祈っているのです。私たちは主の御心を行うことにおいて、まだまだ欠けだらけ。状態不十分です。だから、本来あるべき姿にしてもらわなければなりません。私たちは年齢とともに、骨はすり減り、あちらこちらに欠陥が生じ、医者のお世話になることが多いわけだけれども、イエス様は私たちの魂の医者です。私たちの欠けたところをご存じであられ、内なる人を成長させてくださるお方です。

このように、「**平和の神**」はイエス・キリストによって物質的にも、肉体的にも、霊的、精神的にも、関係においても、社会的にも、ありとあらゆる面であなたの必要を満たしてください、あなたを「**完全な者**」としてくださるのです。このようなものは、何らかの勉強会やワークショップに行けば解決するというようなものでもありません。これらのものはすべてイエス様の血によって満たされるのです。このイエス様の血によって、「**平和の神**」ご自身が、あなたがたが神の御心を行うために、すべてのことについて、あなたがたを「**完全な者**」としてくださるのです。

このような神がいったいどこにいらっしゃるのでしょうか。私たちが今まで理解していた神は、自分の欲望を満たすために利用していたにすぎない神であって、自分が作った偶像にすぎませんでした。しかし、そのようなものが果たして本当に私たちを救うことができるのでしょうか。できません。私たちを救うことができるのは、私たちのために十字架で死なれ、三日目によみがえって、私たちを罪の中から救い出してくださいました救い主イエス・キリスト、「**平和の神**」です。この方があなたのすべての必要を満たし、あなたを「**完全な者**」にしてくださいます。であれば、私たちはこの神を信じ、この神にすべてをゆだねなければなりません。あなたがたを「**完全な者**」としてくださいますようにという祈りの中に、あなた自身を置かなければならないのです。



ヨハネの誕生を祝う祝日の讃歌の歌詞

Ut queant laxis :

あなたの僕（しもべ）が「ウト：のびのびと」

Resonare fibris :

声をあげて「レ：響かせて 胸いっぱい」

Mira gestorum :

あなたの行いの奇跡を「ミ：驚くべきみわざを」

Famuli tuorum :

響かせることができるように「ファ：しもべたちが 語れるように」

Solve polluti :

私たちのけがれた唇から「ソ：汚れた 唇から」

Labii reatum :

罪を拭い去ってください「ラ：取り除いてください 罪を」

Sancte Iohannes :

聖ヨハネ 「聖なるヨハネよ」

六つの音の音階の次に7番目となる「シ」を採用しました。

「シ」は「Sancte Ioannes 聖ヨハネ」の頭文字を取って「si」と発音することになりました。

そして「ウト」は発音しにくいので、「主なる神」の「主」の「Dominus（ドミニヌス）」の頭文字「do」を採用した。

